

生活世界の問題

阿 部 未 来

「自然科学者を含めこの世界に生きている人間が、実践的であれ理論的であれその全ての問いかけを向けうるのは、この世界にだけなのである。」₍₁₎ まことに我々が生きている世界は唯一であり、我々の活動は全てこの中で展開する。この活動の中で我々は、環境と自己の支配を企て生の安定を得ようとする。この支配をかって飛躍的に確実なものとしたのは学の登場である。フッサールの『危機』書を鳥瞰するなら、そこにはこの学というものの真の意味での完成の企図「絶対的に基礎づけられた普遍学」の理念が貫通している。この理念は、歴史のおもむく究極（Endstiftung）に、「必然性における生活」₍₂₎、即ち最高の学的確実性における生活という、人間性の究極の理想を設定し、そこで実現されるはずの「至福」を予想している。しかしこの小論では、フッサールのこの壮大な構想の全体を追うわけにはゆかない。我々が主題とするのはよりささやかではあるが、「絶対的に基礎づけられた普遍学」の構想の内では重要な位置を占める問題、生活世界の問題である。従来フッサールの生活世界論は様々な問題を含むものとして存在し、当初からそのことが指摘されてもいた。超越論的現象学は、この眼前の素朴に見られた世界を否定したり、他の層域に還元したりするのではなく、また何らかの操作を加えて一定の成果を得ようとする学でもなく、むしろこの世界を真の意味で「理解可能なものたらしめる」と主張する。しかしこれに対し、学を含む全実践の地盤として存在するとされる生活世界に対し、それをその力動的主体的構造において厳密に理論化することの困難性、また生活世界をそれ自体「自己完結的」な領域と規定し、他の層位から純粹に抽出し、その上で他の領域との連関を問いうることの問題性、さしあたり、これらのことが疑問とされうるであろう、しかし根本的な問題は、およそ世界という概念の上に *Leben* という規定の付加されたことの意義は何であるか、そしてこのことは超越論的現象学の全体構成に何をもたらしたかということである。

I

まず「経験と判断」と「危機」の叙述により、生活世界概念の一般的なことを明らかにしたい。紙数の都合上簡潔に行なうことにする（以下「経験と判断」は EU と略記する）まず EU では、箇条書きという明確な形で生活世界を経由する二段階の還元が説かれている如く、一般的普遍的世界（*vorgegebene Welt*、より詳細には *immer schon vorgegebene Welt*）と生活世界の間の区別が明確に措定される。ここに前者は、「イデー」期以来追求されてきた自然的世界概念の系統を引く。即ちその根本性格として、根源的存在信憑の対象であること、総体的地平（*Gesamthorizont*）としての性格、根源的な親しみ深さの性格、全体的包括的唯一性などが挙げられる。しかし EU の場合、一般的普遍の世界が以上のような規定において従来の世界概念と軌を一にするとともに、述語的明証から前述語的明証への帰還がその序論の課題として設定され、そこでは特に生活世界との対比が問題である以上、それはある特殊な視点から注目されている。

そもそも我々が EU において、端的に「世界」とか、あるいは「前もって与えられている世界」(vorgegebene Welt)と呼ばれているものを、一般的普遍の世界などと呼ぶのは、その包括的全体性をきわだたせんが為に他ならず、生活世界がその包括的全体性の内で、ある限定を受けて成立するからに他ならない。この限定の中心点は、一般的普遍の世界が、「その一切の意味沈殿、特に科学や科学的規定を伴ってあらかじめ与えられている世界」₍₃₎と表現されている点に表われている。これに対し生活世界を限定するその定義は、まず端的かつ単純に「経験の世界」₍₄₎ということであり、しかも「日常的に経験という表現に結びつけられている全く具体的な意味での経験の世界」ということである。しかし、また他方生活世界は、「理念化の作用を全く知らぬ」₍₅₎世界、「理念化の意味層の除去によって打ちたてられる根源性」₍₆₎における世界としても定義される。この後者の定義は、特に上に「科学や科学規定」と呼ばれていたものに基準を合わせている。科学はそもそも数学により構成された様々の理念的対象性を使用して自然規定を行なうというのがフッサールの見解であるが、この理念性は、本来、相互主観的一義性、遍時間的存在性、主観の okkasionell な心理条件を超脱した対象性として、時間空間的規性をその本質とする real な存在者とも、また実在者を呈示する現出の主観性とも対立する。つまり「個物との直接の関係」₍₇₎(direkte Beziehung auf Individuelles)と定義されている狭義の経験の対象とは全く異なったレベルの存在者である。従って、述語の明証を基ける前述語の明証、即ち広い意味での「経験」を純化抽出するという EU の歩みにおいて、まず最初に焦点が当てられるのは、このような「理念性」の層であり、それが除去されねばならない。しかし、ということとはとりもなおさず、素朴な世界意識においては唯一の統一であるかに見える一般的普遍の世界も、その内に様々の成層を含む多層的構造のものであることを意味する。そこに生活世界というものが単なる「世界」と区別され、そこからある意味での純粹抽出を経なければ取り出されえないことの理由がある。しかしながら他方、この純化抽出としての生活世界への還元は、次の点において問題を有するものとなっており、EU で行なわれている操作は単に「理念性」の層を除去するという単純なものではない。即ち第一には、「理念化の意味層の除去によって打ちたてられる根源性」における世界という生活世界の定義と「経験の世界」というその定義の間にある間隙、中間にあって両者に分別することの困難な領域がないかが問題となる。また第二には、「経験の世界」として定義される場合の「経験」ということの範囲が問題となる。

まず第二の問題点からアプローチしてゆくならば、EU において「経験」という概念は、相当の広範囲を包括するものとして使用されている。「《経験》」ということの持つ日常的に親しみ深くかつ具体的な意味は、特に認識的一判断的な働きのみを指し示しているというよりは、むしろいっそう、実践行為的な働きや価値評価的な働きの方を指し示している。₍₈₎ところで、このように実践や価値評価などに関係する広い意味で「経験」という概念が規定されるとすれば、経験というものが、単に単層的構造を持つのではなく、すぐ後にも見る如く、多層的なものとして把握されてこざるを得ない。ということは、とりもなおさず「経験の世界」として定義された「生活世界」それ自体が、一般的普遍の世界がそうであったのと同じく、単に一層的な領域としてで

はなく、多様な成層を含む多層的な世界として規定されるということである。生活世界の多層性において特に顕著なのは、受動的的存在信念において与えられる感性的自然と、それ以外の層、情緒、価値、実践的経験の層との対立である。フッサールは、既に「イデーン」期以来継続する見解を根底に保ちつつ、「受動的ドクサ、受動的的存在信念の領域、この信念の基盤は、……………（中略）」また存在者における一切の個々の価値判断、実践活動の基盤である $J_{(9)}$ という。換言すれば、何かが有用である、美しい、恐しい etc. として与えられるためには、それは何らかの仕方で感性的に与えられていなければならぬ $J_{(10)}$ という次第である。しかし、EU のこの箇所では、純粋な感性的知覚において与えられたものが、様々の規定、活動の基体として存在するという観点から問題となっている以上、感性的自然、物体性の優位は、その受動的的存在信念における所与性にあるという他に、対象を有体的現前性において与えるというその性格にあるだろう。そもそも「イデーン」の時期から、こうしたフッサールのある意味での自然主義は明白であり、例えば「イデーンⅡ」で彼は、物体性の本質規定の一つを伝統通り「延長性」にあるとし、この延長上に感性的充実内容が配置されるという形態を対象規定の最も本源的な形とみなした。また同書においてフッサールが、存在者の各領域の構成を物体の構成を基盤として展開したことも、彼の自然主義のある意味での発現とみなされるべきである。従って、EU においては、こうした感性的物体性の優位が次の如く表現されることになる。「経験の内で前もって与えられる自然的物体は、認知的のみならず、また価値規定、実践規定等、広い範囲にわたる全ての規定の究極的基体である。 $J_{(11)}$

EU においては、このような感性的自然の優位性が見られ、それは生活世界への還帰という第一段階の還元の性格すら規定している。即ち EU では、生活世界へ還帰するといっても、このような純然たる感性的自然の層へ還帰するという保留がある。その上もう一つ重大な保留があり、これは広い意味での生活世界の内部のもう一つの成層を明らかにする。即ち、この感性的自然としての生活世界は、その独我論的層において考察される。つまりフッサールは、表現、相互主観性の意味層をも、生活世界における第二次的意味層、「基礎づけられた層」と見なす。まず第一に、製作者の精神の客観的外化としての文化的意味層がこれに該当する。更に他者ですら、身体的物体の統覚に基礎づけられている。つまり他者の構成には、有体的物体としての身体の統覚の媒介が必要である。

しかし、このような広義の意味での精神の表現に関する問題においては、先に我々が第一の問題として指摘した事態、即ち、生活世界の二つの定義の間の間隙の問題、換言すれば、「経験の世界」として定義された生活世界と、理念化の意味層の除去の後の剰余として定義された生活世界の間に意味のズレがないかということが問題となる。生活世界を単なる感性的自然としてでなく、その広い意味において取るならば、表現的意味層は、当然生活世界の内に入る。しかし、表現、相互主観性の意味層にふみこむことにより、我々は既に「理念化」の意味層に踏み込んでいるのではないか。例えば、フッサールは、対象の命名の際に働く「自然的経験の対象化」の内に既に理念化の機能があると言い、これを「第一次の理念化 $J_{(12)}$ 」と呼んでいる。更に言えば、生活

世界が「経験の世界」と定義されたに對し、経験作用そのものの内に既に理念性の萌芽が見出されはしないか。例えば、諸対象の類型性の受動的覆合によって生ずる経験的一般性の構成の場合はどうか。つまり、こうして問題となる様々のことは、総じて言えば、「理念化の意味層を取り除くことによって到達される生活世界」という基本規定に、一定の曖昧さの付着していること、生活世界の「自己完結性」に對する疑念があることである。この問題をより深く扱うことは、フッサールの生活世界論を論ずる上での一つの大きな主題となることである。しかし我々は主題の関係上、この問題に深く立ちいることは避けたい。我々が以上の分析を通じて確認しておきたいことは、次の点のみである。即ち、一般的普遍的世界の包括的全體性を限定して生ずる生活世界も、その内部に様々な意味層の對立を宿した多層的世界であること、そしてその核的部分たる感性的自然に對し、「理念化の意味層」へのある程度の連接性を有する、表現、価値などの経験の層があり、いわば「理念化の意味層」を中軸として對比された一般的世界と生活世界の對立が、生活世界それ自身の内部にある程度反映しているということである。そして、これら生活世界の様々の成層間の對立は、『危機』において、生活世界に生きる人間主体性の機能性、態度性が考慮されるにおいて、新しい視点から、より尖鋭化して示されてくると思われるのである。

さて、『危機』において生活世界は、EUとは異なり、端的に「相互主観的世界」⁽¹³⁾として考察される。もっともそれは超越論的モナドの相互主観性ではなく、人格共同体としての相互主観性である。それと対応して、この人格の営為の要件、情緒的価値的経験及び諸々の文化的対象性も、考察を受けるべき生活世界の内に編入されてくると考えてよい。もちろん『危機』においても、生活世界が有体的物体を与える知覚的明証性の世界であることは第一義的に重要なことだとされている。ここから、生活世界の概念に、知覚世界と文化世界（ないしは実践的＝文化的世界）という意味の兩義性のあることを指摘する様々の解釈が生じている。⁽¹⁴⁾しかし『危機』の叙述においてこの両者は、人間主体の活動に對するその役割の相違において、特に科学活動に對して有する関連性の違いにおいて明確に區別され、決して知覚世界、感性的自然、有体的物体環境という規定が、文化的世界の包括性に吸収されてしまうことはない。まず、知覚的明証の圏域としての生活世界と科学との関係について言えば、フッサールは、これを「基礎づけ」という関係で一括して述べているが、この連関は、フッサールが個々に指摘する範囲内でも非常に多岐に渡る。科学の使用する記号、測定器具、共同研究者の生活世界への現出という余りに一般的な側面についてのみならず、観察、検証活動における関連が指摘される。更に根本的には、学はともかく世界に関する学であり、ともかくも世界総体、世界の内に現われるものの全てが学の対象であり、かつ対象となる可能性を持つという点が、上述の雑多な側面に對立して指摘されるべきである。まず、諸学の体系的統一としての普遍学は、世界総体（Weltall）を取り扱うという理念的可能性を持つ。しかし、学の当面の活動においては、生活世界の存在者は、その経験的類型性において各科学の理論の一般的主題を規定し、その意味を規定する。こうして、複雑に錯綜しあう様々な諸側面においてはであるが、ともかくも生活世界は学に對しその経験的基盤を与えるという機能

を有する。しかし、フッサールは、『危機』において新しく、学の生活世界に対する「包括的帰属連関」ともいうべきものについても指摘する。彼は、この連関を指摘することにより、生活世界の内に学の対象領域を見出すこととは異なったパースペクティブにおいて、両者の連関を問題にしようとする。『危機』書においては、生活世界の学への基礎づけ機能に比して、前者への後者の帰属性がまず次のように包括的に指摘される。「具体的生活世界は、＜学的に真の世界＞に対しては、それを基礎づける地盤であると同時に、その独自の普遍的具體相においては、それを包括する。」⁽¹⁵⁾（傍点筆者）フッサールのこの「包括的帰属連関」の指摘は、さしあたり、文化的世界の規定をも併せ持つことにより、学を文化的、精神的形成体として包括するに至った生活世界概念の拡張の結果と見なされるかも知れない。その解釈に従えば、生活世界は、全ゆる存在者を包括して前もって存在する世界という、EUの一般的世界の概念に接近したということになる。確かにその側面も存在する。しかしより本質的な点は、『危機』の生活世界が、単にその包括性を増大させたり、また存在信念の根源的基盤や、個別的経験の基盤として捉えられているのみならず、「実践の地盤」、理論的であれ非理論的であれ、全ゆる実践の普遍的環境として強調され始めたという点である。「生活世界は、この世界の内に目ざめつつ生きている我々にとって、常に既にそこに存在し、理論的であれ、理論外的なものであれ、全ゆる実践の《地盤》として存在する。」⁽¹⁶⁾ EUにおいても、生活世界の内に感性的自然の層とそれ以外の価値的表現的意味層の対立が存在し、生活世界の広狭二義性が問題となっていたことは既に指摘した。しかしEUでは、この広狭二義の差異は、経験の成層の問題、情緒、価値的体験、表現の意味層を付加するか否かの問題であった。しかし『危機』においては、生活世界に活動する人間の主体性がより鮮明化し、生活世界は、その知覚的明証において経験科学に、極めて複雑な様々の側面においてではあれ、ともかくもその経験的基盤を与えるという機能と、全ゆる実践の「地盤」であるという機能の対比を含むようになった。してみれば『危機』において *Leben* という語は、単なる生、体験的生というより強い意味、文字通り生活という意味において使われているわけである。学に対しては、この生活世界は、単に諸学の総体的対象としてのみならず、学に携わる時であれ、それ以外の場合であれ、学者という一人格の活動全体を包括する総体的環境として登場する。そしてこの人格の活動全体の総体的流れの内から、学的活動その他が能動的に浮上してくる様相は、「態度」とか「職業」とかいう実践的概念によって特徴づけられている。⁽¹⁷⁾ 総体的環境としての生活世界には、人格の総体的活動の流れが存在するが、その中から一定の主題的関心の方向性において、一定時間の区分において、ある活動様式の統一、関心領域の統一を維持する「態度」、「職業」なるものが存在する。学的態度、理論的態度とて別様ではない。それは生活の総体を区分し、生活世界の内で持続する特殊の実践である。

フッサールの生活世界論は、結局生活世界を客観的学と対比させ、両者の連関を明らかにし、更に客観的学を絶対的に基礎づけられた主観的普遍学の内に統合するという眼目の下に企てられたものであるから、我々も次にその点について論じなければならないし、またその際、特に生活世界が「実践の地盤」という規定性を付与されたことが如何なる意義を持つのか、そしてかつて

人間活動の背景としてのみ存在し、「一度たりとも学の主題とされたことのない」といわれる生活世界のこの側面が如何にして厳密に理論化されうるのか、その点についても論じなければならない。しかしその前に、結局生活世界が含む様々な成層の差異、あるいはそれを考察する視点による様々な解釈様相のバリエーションにも拘らず、結局、端的に見、触れることのできる眼前の光景を中核として、それが唯一の統一をなしていることを指摘しておきたい。フッサールは『危機』において先所与性（Vorgegebenheit）と「主観性—相対性」を生活世界の二大規定として提出するが、唯一のものとしての総体的生活世界に妥当するのはこの二つの規定であろう。特に「主観性—相対性」という規定については、これは理念性の領域の客観性、一義性との対比において使用されている。このことは、当然第一には、知覚経験の主観性、現象性を表わしている。しかし生活世界が「実践の基盤」の規定も獲得している以上、subjektiv-relativ という言葉は、主体的—相対的と訳すべき意味を含むとも言える。（現に「主体的」の訳語を採用する論者⁽¹⁸⁾もいるが、本論考では、訳語の統一上、subjektiv は主に主観的と訳し、Subjektivität 等の語についてもそれに準じた。）その場合、subjektiv-relativ という語は、フッサールが「状況の真理」と呼ぶものの、暫定的、有限的の真理性をも表現することになる。フッサールによれば、生活世界における総体的活動の大部分は、高度の学的理性機能を必要とせず、生活連関の暫時的、その場的な類型性を統一する「状況の真理」⁽¹⁹⁾を使用し、これに従ってそのつどの企図を設定かつ達成する日常的理性機能で自足している。ただし、このような「それなりの理性的考慮」も、決して高度の学的理性機能と不連続なものではないこと、また生活世界を超越した視点を設定するのでなければ、両者は生活における機能という点で本質的に異なるものではないこと、これらの事をフッサールは洞察していた。例えば、次節で登場する「完全化の実践」なるものも、いまだ学的理性機能の働きとは言えず、むしろその発生の前提となるものとして登場する。

Ⅱ

さて『危機』において生活世界が、単に経験の認識の総体的基盤としてのみならず、学を含む全実践の基盤（Boden）として強調されたことにより、現象学的判断中止の意義がよりラジカルになるという事態が出現する。以下に節を追いつつ順々にその経緯を追う。

生活世界の総体的規定として提出された、先所与性、主観性—相対性と規定は、矛盾することなく、生活世界に生きる主体の内て共在する。即ち素朴な人間主体は、生活世界の現象性をそれ自体で意識することなく、むしろ眼前の世界へと超出してゆく。「我々は、同一でありながら、ただ我々にとり異なって現われるにすぎぬ諸事物の世界の存在を必然的に信じている。」⁽¹⁾ 物体知覚の超越性、これは経験のアプリオリな構造である。しかし様々な現出において自己を呈示する同一的即自的物体という観念は、規定を持たぬ「必然的ながら空虚な理念」にすぎぬのか。ここに生活世界的因果性に基く帰納的予見を精密化した科学的実践が、「真の自然」に属するとされる規定をそこに満たし入れる。その際、経験における超越性とは次元を異にする様々なレベルの超越性が構成される。これに対しフッサールは、「人間の環境世界は、今であれいつであれ同一であり、従って根源的創造（Urstiftung）や持続的な伝統に対して問題となる点に関しても

同一である」⁽²⁾という根源的前提、つまり生活世界的アプリアリの前提の内で、この高次の超越性を構成する「意味付与」の能作を、その生活世界における起源から、一種の追遂行、「再活性化」(Reaktivierung)において追跡しようとする。しかしその際、この生活世界の内には、フッサールの意図から見ても本来的に重要な部分、つまり人間的主観性とその能力、更には人間主観性の内に隠蔽され、その内でアノニムに働く「作動する主観性」が、未だ解明を寄せつけぬ暗黒の部分として存在した。従って『危機』第九節における、科学とそれに伴う客観主義的世界解釈の発生の解明も、完成されたものというより本質的な点を押さえるための「見取図」の性格を持つ。

この見取図においてフッサールが、常に科学の発生における人間の主体的実践の契機に着目していることが注意されねばならない。フッサールは特にそれを三つの場面で強調的に取り出す。まず第一に、幾何学的形態の原初的発生において、それが想像変更のような表象上の操作のみからは発生しえず、「完全化の技術」という人間実践の媒介を必要としたことが述べられる。この技術は、相互主観的に非一義的な生活環境内の物体の形態から、実践の必要上、平面、直線等の形態を漸進的に完全化する過程へ進み、その進行の理念的極として幾何学的理念性を予示的に抽出する。また第二には、理念的形象の経験界への初歩的適用としての測定術がある。いわばここで初めて「アプリアリな理論と経験との交流」⁽³⁾が原初的に達成され、實在の直観的形態が初めて客観的に規定される。また同時に、理念的形象相互の関係が問題となることにより、基本的図形から全ての理念的形態を体系的に規定するという幾何学の理論化の端初がつけられる。「技術的実践の経験的な、しかも極めて限られた課題設定が、純粹幾何学の課題を動機づけた」⁽⁴⁾のである。また第三には、日常的理性機能において働く予見から、精密な予測機能への発展がある。生活世界に現出する物体は、「感性の型」に従った形で経験的に相互依存する。これはフッサールが直観的環境における事物の「習慣」(Gewohnheit)と呼ぶものである。日常的理性機能は、この状況的類型性により、当面の生活実践に必要な程度の予見を可能にし、安定性を得る。しかし科学において発見されたのは、発達した数学上の「定式」により、この予測作用を精密化することである。フッサールが「理念の覆い」と呼ぶのは、生活世界に適合させられた、こうした数学的定式の事なのである。

以上三つの点においてフッサールは、客観科学がその発展において必然的に踏み越えていった、その主観的—主体的な起源、即ち生活世界とその内に生きる人間主体に注意を向けさせようと狙っている。従って、これらの考察においてフッサールは、生活世界を超脱せず、それに内在した視点を守ろうとしている。というのも、生活世界は唯一の現実界であり、そのつど行なわれた意味の「根源的創造」もこの生活世界のみに立脚したはずであり、現代における自明な事をその場面に持ちこむことは許されぬからである。だが、他方、学の発展には、当然自らの活動に対する反省的活動も付随してきたはずである。従ってフッサールは、同じくこの面にも着目してそれを取り出そうとしている。『危機』の§9においては、この学に付随する反省的思想的契機が、むしろ生活世界を超脱し、そこで働いている人間の主体的機能の隠蔽という方向づけに動いたこと

が指摘されている。この点についてもフッサールは、およそ次の三つのことを指摘している。まず第一には、生活世界的なドクサから超脱し、真の存在についての知識という理念を生み出した理論的態度の発生である。また第二には、形態の領域から感性的充実の領域への数学化の拡大の際に働いた *Leitidee* である。これは世界の全体的統一の確信に基き、形態の領域において成功を見た方法が「世界一般について可能ではないか」という予測を生んだ。更にこの予測が個々の事例で満たされることにより、更に反省的に、「特殊な因果性の全てに先行し、それを導く」とされる「普遍因果性」₍₅₎の思想が導かれる。これはフッサールが、無限にわたる検証においてすら確証できぬものとして、「冒険的」と評した思想である。こうして、科学は自らの活動成果を反省的に吟味しつつ、常に将来の展開を規定する *Leitidee* を生みだすが、究極的に「真の自然」、「因果性の支配する宇宙としての無限の自然全体」という一つの世界解釈に結実する。換言すれば、これは、主観的な現象世界の根底に存在する、その本性において数学的な自然という思想であり、ガリレイとその後継者における発展の根本的な *Leitidee* となったものである。

フッサールは、こうした「真の自然」という客観主義的世界解釈に、学的作業の超越論的根源を忘却させ、真の意味での学、技術的支配の学でなく、世界を根源的明証において真に理解させる学の成立を不可能とした一つの原因を見る。フッサールによれば、「我々の全生活がそこで実践的に展開されるこの直観的世界、この現実を経験され、また経験可能である世界は、我々が技術なしに、或いは技術として何を行なおうと、その特有の本質構造と具体的な因果様式において、あるがままに留まっている。この世界は、物理学が称せられる、幾何学的ガリレイ的な特殊技術を案出することによって変えられるわけではない」₍₆₎。従って科学の機能は、生活世界的な本体的世界の発見的機能にあると考えられてはいないわけである。フッサールは、生活世界に内在的な視点を固執しつつ続けて問う。「ではそれによって我々は何を行なっているのか。まさしく無限にまで拮げられた予見を行なっているのである。」₍₇₎ 予見 (*Voraussicht*) は、全ての素朴な実践生活に本質的なものであるが、自然科学の場合、生活世界に「いわゆる客観的真理というびったりあった理念の覆いを……合わせてかぶらせる。」₍₈₎ これによって予測の精密性と範囲が拡大するわけである。しかし「明らかに学的方法による帰納もまた日常的帰納から生じた」₍₉₎と言われる如く、両者の間には本質的な接続が認められている。科学の機能は、本質的にプラグマティックなものとな見なされている。科学の意味起源の忘却は、「新しく登場した自然科学が、……最初から奉仕するはずの最終目的、即ちこの生活の内にあり、生活世界に結びつけられているはずの目的にまで省察を徹底すること」₍₁₀₎のなかったことに起因し、自己の活動への反省をむしろ実体論に向かわせた点にある。この方向性において、「理念の覆いが、我々をして方法であるにすぎぬものを＜真の存在＞と見なさせる」₍₁₁₎という事態が生ずる。理念の覆いが、「科学者と教養人にとり」真の自然として生活世界になりかわったという次第である。しかし、生活世界に内在的に視点をとるフッサールのこのような考察も、生活世界の中心に存在する主観性という暗黒部分のゆえに、完全なものではなく、むしろ問題の中心点を指し示すものとなっている。客観的科学とそれに伴う技術の形成には、身体と様々な能力を備えて実践的に働く人間的主観性が不可

欠である。しかしフッサールにおいて人間の主観性は、その世界関心的生において自らの活動を自らに対してすらアノニムなままにとどめると同時に、学の究極の根源たる超越論的主観性を隠蔽しているものではないか。逆に言えば、生活世界とその内に実践的に生きる人間の主観性を単に排去するのではなく、新たな態度変更の下で解明するとされる超越論的態度は、超越論的主観性の構成機能を見出すことにより、唯一の現実界から超脱することになるのではないか。我々は、十分な解答を与えることはできぬにせよ、次節でこれらの問題をめぐる圏域にはいりこむことになる。

Ⅲ

さて上に示した如く、フッサールは『危機』において科学を本質的にプラグマテックな機能を果たすものとして扱った。生活世界が「実践の地盤」として扱えられるようになったことも本質的にそのことと関係するはずである。しかしこのような『危機』における実践への注目にも拘らず、フッサールが『危機』で第二段階の判断中止として遂行する「全面的判断中止」の操作は、従来の判断中止の如く、単に世界への根源的存在信憑の停止のみならず、全ゆる意味での実践的関心の発動を停止するという実にパラドキシカルな結末となっている。この判断中止に至る経緯を示すにあたり、我々は再び先に学の生活世界への包括的帰属連関と呼んだものに帰ることにする。この連関からすれば、学は全ての他の活動と同じく生活世界を総体環境とする一つの活動であり、特に理論的という態度をとる一つの特殊な実践であり、その活動と成果の全ゆる側面においてこの世界に包摂される。「学一般は人間の作業であること……が考慮されねばならない。全ゆる実践と同じくこの作業もまた……前もって与えられる経験世界に関係し、同時にその内に組み込まれている。」⁽¹⁾そしてこの活動性において科学の機能はプラグマテックなものとされた。その仮説は、「生活世界における人間の生を構成する多くの実践的仮説及び企図の一つ」⁽²⁾なのである。ところでそもそもフッサールがこうした「包括的帰属連関」にしろ「意味連関」にしろ、学と生活世界の連関を問題にしたのは、§ 34(e)の表題に明確に示されている如く、客観的諸学を「主観的形成体」(subjektives Gebilde)として示したかったからに他ならぬ。そしてこの意図の根底には、客観的諸学を主観的普遍学の内に吸収し、超越論的主観性を根底とする「絶対的に基礎づけられた普遍学」を完成し、これによって必当然的確実性における「至福」の生活を可能にする遠大な意図が存在する。そのためにこそ客観的諸学がまず subjektiv-relativ な領域に属し、かつそれを前提することを示す必要があったのである。しかしながら、単に客観的諸学を subjektives Gebildeとして示すということなら、フッサールの仕方としては「イーデン」以来のデカルト的方途によって世界の存在信憑の停止から一挙に超越論的主観性へ遡源し、そこから全ての存在の構成を説く方法も可能だったはずである。してみればフッサールが特に学に関し、「包括的帰属連関」とそこにおける実践性を説いたのは何故か。やはり『危機』の問題圏においては、専ら知覚と判断を中心としてきた従来の課題設定が学の構成に働く人間主観性の能力を把えるに不十分であるとされた故ではないかと思われる。§ 9において示されたのは、科学の原初的発生において人間の主観性の多岐にわたる能力、習慣的、技術的、シンボル操作的能

力が動員され、それが非本質的でないという事であった。そこでフッサールとしては、この人間主観性と生活世界をその豊富な具体相において主題化する必要を感じたと思われる。というのも、フッサールの言うように、超越論的主観性を基底とする「絶対的に基礎づけられた普遍学」が客観的諸学を吸収するとすれば、中心部分たる超越論的現象学と客観的諸学の接合点は、やはり豊富な内実性において存在する生活世界とその内部に生きる人間主観性であり、従来心理学に属する地点にあることになるだろうからである。だからこそフッサールの企む根本的転換において従来客観的学の「部分的問題」であった生活世界が、いまや「普遍的問題」^{」(3)}になったというのである。ではこの「普遍的問題」であるものをいかに解くのか、特に多岐にわたる能力の主体でありながら、その世界関心的実践において、自らの活動、例えば単純な身体運動ですらアノニムなままにとどめて遂行する人間主観性をいかにその究極の根源から把握し、理論化してゆくのか。

『危機』においては、フッサールの還元論は二段階形式を取っておりその第一のものは、「客観的学の判断中止」と呼ばれる。これによって理論成体として完成し、その妥当性に関し信憑されている科学理論、及び自明化して現代に存続する客観的世界解釈が妥当の外におかれる。この判断中止の根本意図は、純粋な生活世界を超える仮説をたてることによる客観科学の「超越」を予防し、生活世界をその純粋性において「自己完結的領域」と主題化することにある。この段階で我々は未だ自然的態度から超脱してはいないが、しかしこのムンダンな立場で、生活世界的アプリオリを主題として「生活世界の存在論」を築くことも可能である。しかし§ 37 でフッサールはこの道をとらず、その可能性を示唆したのみで、「同様に生活世界に本質的に関係するが、存在論にかかわるのではない新しい主題」^{」(4)}への方向づけをとると言明する。このやり方において、（第二段階の判断中止の前に）我々は暗黙裡に超越論的態度の内にはいりこむことになる。こうすることにより、フッサールはともかくも唯一の現実界である生活世界に対し、超越論的態度はそれと別の領域を開き、かくして「二重真理」という道におちいるのではなく、超越論的態度は、同じく生活世界を主題としつつ、ただしそれを根本的に異なった態度変更において見るということ語っているのである。この態度変更は、生活世界の根本的性格でありながら、素朴に世界へと超出する世界関心的生においては、決して主題化されることのない、生活世界の「主観的一相対的」という性格を新たに主題化する。即ちフッサールはここで「世界を意識的に所有しつつも」「世界地平にはいり込んで生きている態度」とは全く異なる態度の可能性を示唆するのであるが、それは、生活世界の「与えられ方のいかに」^{」(5)}（Wie der Gegebenheit）に着目することであり、「我々全てに、世界または対象が、そもそも単に眼の前に与えられてあり、諸性質の基体として所有されているというだけではなく、それらが主観的現出様式、所与様式において我々に意識されている」^{」(6)}その点に眼を向けようということである。こうして我々は、フッサールが素朴な世界関心的生の向かう生活世界を決して否定しようとするのではなく、むしろ新しい態度において関示された、一切の超越を含め超越論的明証においてそれを解明しようとするのだと理解できる。ただし『危機』第三部Bのその後の叙述は、殆んど単に物の一面に向けられた、しかも暫定的見取り図的なものでしかないことをつけ加えておかねばならない。

IV

ところで、こうして超越論的態度にいったんはいった後、改めて第二段階の全面的判断中止が説かれる。「生活世界が予め与えられているということは如何にして独特で普遍的な主題となるか。明らかに自然的態度の全面変更によってである。」 $J_{(1)}$ しかし注目すべきことに、従来の判断中止では、妥当中止の対象が存在の平面に局限され、端的には世界存在の根源的信念の停止が中心であったのに対し、「危機」では、世界存在の判断中止に加え、それと不可分のものとして「人間の実践を発動させる全ての関心に加担しない」 $J_{(2)}$ と説かれていることである。また「哲学は、まさしく全ゆる実践の眼隠しを取りさるために存在する」 $J_{(3)}$ とも言われている。我々はこうして文字通り「関心を離れた傍観者」となり、超越論的態度において反省的に、自己と世界を超越論的現象として、純粋に「見る」ことを要求される。しかし、先述の生活世界論で示した如く、生活世界が「実践の地盤」として把えられたことと考え合わせると、これは一体如何なる事態であるのか。おそらくそれは、フッサールが人間主体の実践に、根本的に超越性、隠蔽性、匿名性の契機が付着しているのを意識していたからに他ならない。フッサールが§9のガリレイ論で明らかにした事態の一つは、人間主体の活動の成果に、本質的に自らの意味起源からの遠隔化の傾向が存するという事態であった。フッサールは特にこの事態を習慣化、技術化という点に見、具体的には数学における技術化、ゲーム化という例(§9[g])や、研究主体における本能と情熱という下部構造の問題(§9[d])を指摘している。ガリレイはいわばこうした事態の象徴として名ざされ、「発見する天才であったと同時に、隠蔽する天才でもあった」 $J_{(4)}$ と形容されている。しかしこの問題を個別的問題の次元で扱うのではなく、根底的な次元で扱うならば、再三強調した人間的主観性の存在位置、それと超越論的主観性の関係の問題となる。人間主観性は、多様な能力の主体でありながら、その生において大部分自らの活動を自らに対しアノニムにとどめたまま遂行する。根拠の明証の意識を必要とするのは、特別な場合、しかも大部分高次の理性的作業の場合である。°また学的作業の場合ですら、研究主体は、本能と情熱に支えられ、まず自らの方法を整備し、外的世界への支配を拡大することへと向かった。そのような人間の主体の存在様態の根底には、この主観性が本質的に、世界とその内の「物」に関心する主体であるという事態が存する。してみれば、意味付与と存在妥当の究極の根源たる超越論的主観性が必然的に隠蔽され、その究極的に作動する能作が知られず、従って世界と世界に関する学に謎の部分が残されたという事態の根底には、人間的主観性のこのような存在様態が存すると言わざるを得ない。だからこそ、超越論的判断中止は、「それ自身く構成されたものである」外界へと向けられた行為 $J_{(5)}$ 「外的志向性」にまで拡大強化して適用される必要があったのであり、結局全ゆる超越を停止した状態で、生活世界とその内に生きる人間主体を把えるという逆説的課題に帰着するのである。

さて紙幅に少々余裕のない現状で我々は最後の問題に手短かに手をつけねばならない。結局の所、我々の生活世界の考察の中心に浮上してきた人間的主観性に対し、「危機」では具体的にど

のような位置が与えられるのか、このことを「作動する主観性」という概念との連関で論じることとしよう。「危機」において作動する主観性について触れられた箇所は少ないが、およそ次の四点が指摘されうる。1. まず作動する主観性は人間的主観性との対比において捉えられている。2. また作動しつつも蔽われているという隠匿性をその性格とする。3. エゴ―コギト―コギタートウムという三肢構造の内、特に自我極に対して「作動する」という規定が冠せられる。4. 作動しつつも、その成果を沈殿させ、「超越論的獲得物」として自己を客観化する。⁽⁶⁾ こうして見ると作動する主観性は、その自発性の中心から発しつつ作動しながら、様々な統覚的成果を獲得物として沈殿させつつ、人間主観性に自己を客観化し、かつこの人間的主観性の世界関心の生の中で自己の存在を蔽われてしまうような主観性であり、従来、ノエマ的契機をも含む「領野」として捉えられた超越論的主観性と、構成的に働く超越論的主観性の両義性が存在した中で、後者の性格を強制的にとり出したものとも言えるだろう。だからこそ、人間的主観性は、超越論的主観性の自己客観化だという表現もなされるのである。

しかし、人間的主観性に関しては、この自己客観化という規定のみではいかにも貧弱であり、生活世界と人間的主観性に対して立てられた問題設定にそぐわないように思われ、より具体的な分析が欲しい所である。ただし現代の危機の問題から発しつつ、過去を回顧し、将来を展望しつつ、その中で超越論的現象学の道を説くという『危機』書のプログラム呈示的性格の内では、フッサールがこの点に関し、あまり詳細な点に触れていないのも納得できる所であろう。我々は、「超越論的獲得」を軸とする、超越論的主観性の自己構成、自己客観化の問題に関し、具体的分析を得たいと思うならば、「イデーンⅡ」等、その他の著作を参照することにより、ある程度の満足を得る他はないのである。従って、この小論も、ここにおいて一応の結末をつけるとしても、なお論ずべき点が多々残されたこと、このことは銘記しておかねばならない。

註

- I 1. Krisis, (Die Krisis der europäischen Wissenschaften und transzendentale Phänomenologie, Husserliana VI) S. 50
2. Ebenda. S. 275
3. EU (Erfahrung und Urteil) S. 49
4. Ebenda. S. 38 及び S. 52
5. Ebenda. S. 44
6. Ebenda. S. 51
7. Ebenda. S. 21
8. Ebenda. S. 52
9. Ebenda. S. 53
10. Ebenda. S. 53
11. Ebenda. S. 60

12. Ebenda. S. 58
13. Krisis. S. 136
14. D. Carr, Phenomenology and the Problem of History P. Janssen,
Geschichte und Lebenswelt 等を参照されたい。
15. Ebenda. S. 134
16. Ebenda. S. 135
17. Ebenda. § 35
18. 具体的には、『実存主義』67号～79号に掲載された吉沢伝三郎氏の力作「生活世界
の現象学」を参照されたい。
19. Ebenda. S. 135

II 1. Die Krisis der europäischen Wissenschaften…… S. 20

2. Ebenda. S. 386
3. Ebenda. S. 21
4. Ebenda. S. 26
5. Ebenda. S. 38
6. Ebenda. S. 51
7. Ebenda. S. 51
8. Ebenda. S. 51
9. Ebenda. S. 50
10. Ebenda. S. 52
11. Ebenda. S. 50

III 1. Krisis der europäischen Wissenschaften…… S. 120

2. Ebenda. S. 133 ~ S. 134
3. Ebenda. § 34(f)
4. Ebenda. S. 145
5. Ebenda. S. 147
6. Ebenda. S. 147

IV 1. Krisis der europäischen Wissenschaften…… S. 151 (§ 39)

2. Ebenda. S. 159
3. Ebenda. S. 229
4. Ebenda. S. 53
5. Ebenda. S. 180
6. 「作動する主観性」に関する以上のような特徴づけに関しては、特に Krisis. § 50,
§ 54(a) (S. 187), 同じく(b), § 59, § 72 の叙述を参照されたい。

[哲学博士課程 3 回生]